

資 料

若手介護職の介護の意識に関する調査

竹 内 さをり*1・備 酒 伸 彦*2

Survey of the Consciousness of Young Care Workers Regarding Care

TAKEUCHI Sawori and BISHU Nobuhiko

Abstract: This study aimed to clarify the ideal and actual status of care by young care workers. The results of the questionnaire survey revealed that care workers work in a manner where ‘care that brings comfort to the subject’ is considered ideal. In actual facilities, we felt that such is not adequately implemented. On the other hand, for daily living activities such as ‘eating’, ‘excreting’, ‘bathing’, ‘maintaining a stable posture’ and ‘basic activities’, we agree that the environment of their implementation matches the current situation. Moreover, it became evident that young care workers take their role in ‘maintaining a stable posture’ and ‘basic activities’ as a matter of course. With regard to duration of experience, those with at least 1-year of experience had a consciousness that differed from those with less than 1-year of experience with caring. In particular, for ‘eating’, they felt it a matter of course to ‘maintain a stable posture’ and could be easily done. In addition, we found that with experience, their consciousness regarding the ‘protection’ of subjects also increased.

Key Words: Young care worker, Care, Consciousness

抄録：本研究は、若手介護職の介護に対する理想と実際を明らかにすることを目的とした。質問紙による調査の結果、若手介護職は「対象者の思いに寄り添った介護」を理想として勤務しているが、実際の施設では十分に実施できていないと感じていることが分かった。一方で、「食事」「排泄」「入浴」や「姿勢保持」「基本動作」といった日常生活活動に対しては、実施できる環境とできている現状が合致していることが伺われた。また、「姿勢保持」や「基本動作」は、若手介護職にとって、その役割として当たり前に行える内容として捉えられていることも明らかとなった。経験期間では、1年以上の経験を有することで、1年未満の介護職とは異なる意識を有していることも示唆され、特に「食事」については、「姿勢保持」などと同様に当たり前に行える内容と感じていることが分かった。また、経験を得ることで対象者の「予防」についての意識も高くなることが分かった。

キーワード：若手介護職、介護、意識

1. はじめに

2007年に日本は超高齢社会に突入し、2018年の高齢化率は28.1%と報告されている¹⁾。ま

た、国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口²⁾では、わが国の総人口は人口減少過程に入っており、2029年に人口1億2,000万人を下回り、その後も減少を続けるとされている。

このように著しい高齢化と人口減少が進むわ

*1 甲南女子大学看護リハビリテーション学部理学療法学科

*2 神戸学院大学総合リハビリテーション学部教授

が国において、高齢者介護のニーズはさらに高まることは明らかで、質の高い介護職を量的にも確保することが求められる。ところが介護現場の現実に目を向けると、介護職は離職率・労働移動率が高く³⁾安定して従事者数を保てない状況にある。

介護職の離職者の経験年数別内訳は、「1年未満」の者が48.5%、「1年以上3年未満」の者が35.2%であり、3年未満の早期離職者が約8割を占めるとされている³⁾。神部は、介護職の早期離職を防ぎ、職場への定着に向けた具体的対策を講じていくためには、勤続年数が短い若年層の介護職が労働環境をどのように認識しているのかを把握しなければならないとしている³⁾。さらに、廣野は介護職の離職を防止するには、仕事満足度を高めるという何らかの手段が有効に機能する可能性があるとしている⁴⁾。

このようなことから、若手介護職の介護業務の現状を把握し、どのような仕事にやりがいや働きがいを見出しているのかを知ることは、介護職の勤務継続の可能性を検討するうえで重要であると考えられる。そこで本研究では、若手介護職がどのような理想を持って介護に従事しているのか、また、施設でできると感じている介護と実際に行っていると認識している介護について把握し、その理想と実際を明らかにしたい。

2. 方 法

2017年度および2018年度にA県で行われた高齢者福祉新任職員研修の受講者に対して、質問紙を用いた調査を行った。

調査内容は、基本情報として年齢、性別、経験期間(月数)、所属、職種、主な業務を記載し、問1~4の設問に対して表1に示す項目から選択回答を得た。設問は、問1「あなた自身は、どのような考え(理想)を持って高齢者介護を行っていますか。当てはまるものを全て選択してください。(以下、『理想とする介護』)」、問2「あなた自身が、問1のうち重要だと思うもの3つを選んでください。(以下、『重要な介護』)」、問3「あなた自身は、問1のような高齢者介護が現在勤務する施設で可能だと思いますか。可能だと思うものを全て選択してください。(以下、『施設で可能な介護』)」、問4「あ

表1 各設問内容

- | |
|---------------------------|
| 1. 病気や障害を治す介護 |
| 2. 病気や障害を予防する介護 |
| 3. 痛みを和らげる介護 |
| 4. 好ましい姿勢(臥位や座位)を保つ介助 |
| 5. 好ましい基本動作(寝返りや起き上がり)の介助 |
| 6. 適切(当事者が楽しめる)な食事の介助 |
| 7. 適切(当事者が快適)な排泄の介助 |
| 8. 適切(当事者が快適)な入浴の介助 |
| 9. 当事者の思いに寄り添った介護 |
| 10. 当事者の行いたいことを支援する介護 |
| 11. 合理的で短時間に終わる介護 |
| 12. 介護者が疲れない介護 |

なた自身は、問1のような高齢者介護を勤務する施設で行っていますか。行っているもの全てを選んでください。(以下、『施設で行っている介護』)」である。

得られた結果について、全体および経験期間群別に問1~4の設問別に項目ごとの選択割合を単純集計にて分析した。経験期間は、経験月数が12カ月以下を1年未満群、13カ月以上を1年以上群とした。また、『理想とする介護』と『施設で可能な介護』、『理想とする介護』と『施設で行っている介護』、『施設で可能な介護』と『施設で行っている介護』の選択者における相関をFisherの正確確率検定を用いて分析した。有意水準は5%未満とし、分析には、SPSS ver 20.0 for Windowsを使用した。

3. 倫理的配慮

対象者には、研究の目的や内容、方法および個人情報を守ること、また、研究への参加は自由意思であり参加同意後にいつでも辞退できること、参加辞退によって不利益を被らないことを口頭で説明を行った。その後、回答は無記名であること、調査の回答をもって研究に同意したとみなすこととし、その旨を口頭で説明した。

以上について、神戸学院大学倫理委員会の審査の承認を得て実施した(承認番号SEB17-41)。

4. 結 果

質問紙を提出した人数は256人であった。このうち、無回答項目のある人を除いた239人

(93.4%) を回答者として分析対象とした。

回答者の性別は男性 91 人 (38.1%), 女性 148 人 (61.9%) で, 平均年齢は 26.98 ± 10.33 歳, 平均経験月数は, 9.08 ± 11.76 カ月であった。所属別, 職種別内訳, 主な業務は表 2 に示すとおりである。

経験期間別では, 1 年未満群 168 人 (70.3%), 1 年以上群 71 人 (29.7%) であった。その内訳を表 2 に示す。

各設問における選択割合および分析結果を以下に報告する。

1) 各項目の選択割合

設問ごとの各項目の選択割合について, 全体と経験期間群別の結果を示す。

(1) 全体 (図 1)

『理想とする介護』として最も選択者が多かった項目は, 「当事者の思いに寄り添った介護 (以下, 思い)」であり 220 人 (92.1%) が選択した。次いで, 「適切な排泄の介助 (以下, 排泄)」193 人 (80.8%), 「適切な食事の介助 (以下, 食事)」189 人 (79.1%), 「適切な入浴の介助 (以下, 入浴)」186 人 (77.8%) と三大介護

表 2 対象者の属性

属性	項目内訳	全体 n = 239		経験 1 年未満 n = 168		経験 1 年以上 n = 71	
		n	%	n	%	n	%
性別	男性	91	38.1	66	39.3	25	35.2
	女性	148	61.9	102	60.7	46	64.8
平均年齢		26.98 ± 10.33 歳		26.1 ± 9.48 歳		31.45 ± 10.92 歳	
経験月数		9.08 ± 11.76 ヶ月		3.19 ± 2.44 ヶ月		23.1 ± 13.26 ヶ月	
所属	特養	180	75.3	125	74.4	55	77.5
	グループホーム	11	4.6	9	5.4	2	2.8
	デイサービス	12	5.0	9	5.4	3	4.2
	その他	36	15.1	25	14.9	11	15.5
職種	社会福祉士	11	4.6	10	6.0	1	1.4
	介護福祉士	102	42.7	75	44.6	27	38.0
	ホームヘルパー	42	17.6	25	14.9	17	23.9
	その他	84	35.2	58	34.5	26	36.6
主な業務	介護	233	97.5	163	97.0	70	98.6
	相談支援	6	2.5	5	3.0	1	1.4

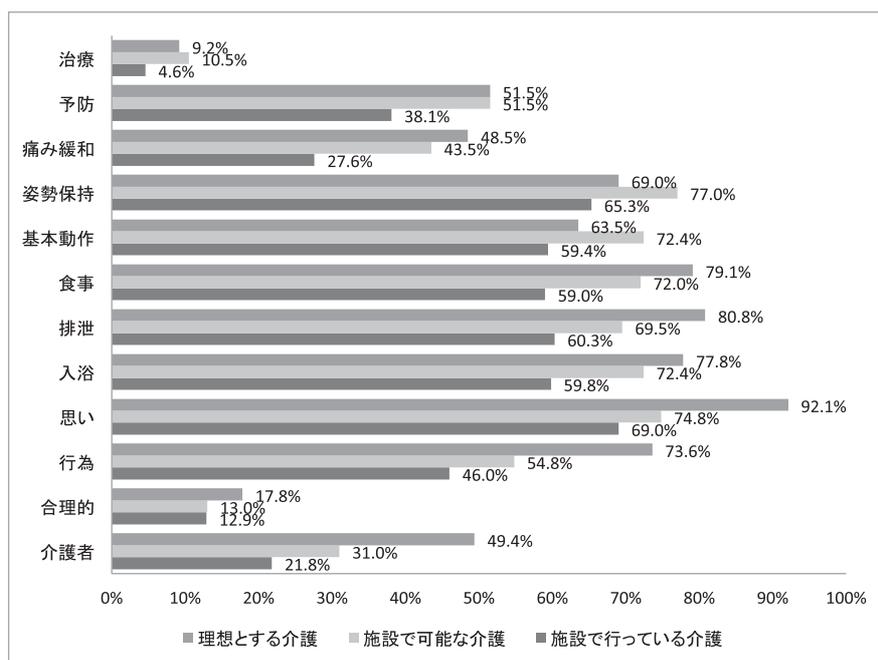


図 1 設問別, 項目別選択者割合 (全体)

と呼ばれる内容を選択する者が多かった。選択者が少なかった項目は、「病気や障害を治す介護(以下, 治療)」22人(9.2%), 「合理的で短時間で終わる介護(以下, 合理的)」42人(17.8%)の順であった。

『施設で可能な介護』で最も選択者が多かった項目は、「好ましい姿勢を保つ介助(以下, 姿勢保持)」184人(77.0%), 次いで「思い」178人(74.8%), 「好ましい基本動作の介助(以下, 基本動作)」と「入浴」173人(72.4%), 「食事」172人(72.0%)であり, 姿勢の介助が「思い」や三大介護に比べ選択者が多い結果となった。選択者が少なかった項目は, 『理想とする介護』と同じで「治療」25人(10.5%), 「合理的」31人(13.0%)であった。

『施設で行っている介護』では, 「思い」178人(69.0%)が最多で, 「姿勢保持」156人(65.3%), 「排泄」144人(60.3%)の順, 次いで「入浴」143人(59.8%), 「基本動作」142人(59.4%), 「食事」141人(59.0%)であった。選択者が少ない項目は, 他の設問と同様「治療」11人(4.6%), 「合理的」31人(12.9%)であった。

また, 『重要な介護』では, 「思い」81.2%, 「当事者が行いたいことを支援する介護(以下, 行為)」49.0%, 「疾病や障害を予防する介護(以下, 予防)」31.4%の順に多かった(図2)。

(2) 経験期間別(図3, 4)

『理想とする介護』では, 1年未満群は「思い」157人(93.5%)が最多であり, 次いで「排泄」139人(82.7%), 「食事」136人(81.0%), 「入浴」132人(78.6%)の順であった。1年以上群も, 「思い」63人(88.7%)が最多で, 次いで「排泄」と「入浴」が54人(76.1%), 「行為」52人(73.2%), 「姿勢保持」51人(71.8%)であり, 「食事」は43人(60.6%)であった。

『施設で可能な介護』では, 1年未満群は「姿勢保持」が133人(79.2%)で最多, 次いで「思い」132人(78.6%), 「基本動作」128人(76.2%), 「入浴」「食事」「排泄」の順であった。1年以上群も, 最多は「姿勢保持」51人(71.8%), 次いで「食事」49人(69.0%), 「入浴」47人(66.2%), 「思い」46人(64.7%), 「基本動作」と「排泄」が45人(63.3%), の順であった。

『施設で行っている介護』は, 1年未満群が「思い」123人(73.2%), 「姿勢保持」「食事」「排泄」「入浴」が104人(61.9%), 「基本動作」99人(58.9%)であった。1年以上群は「姿勢保持」52人(73.2%), 「基本動作」43人(60.6%), 「思い」は42人(59.2%), 「排泄」40人(56.3%), 「入浴」39人(54.9%), 「食事」37人(52.1%)であった。

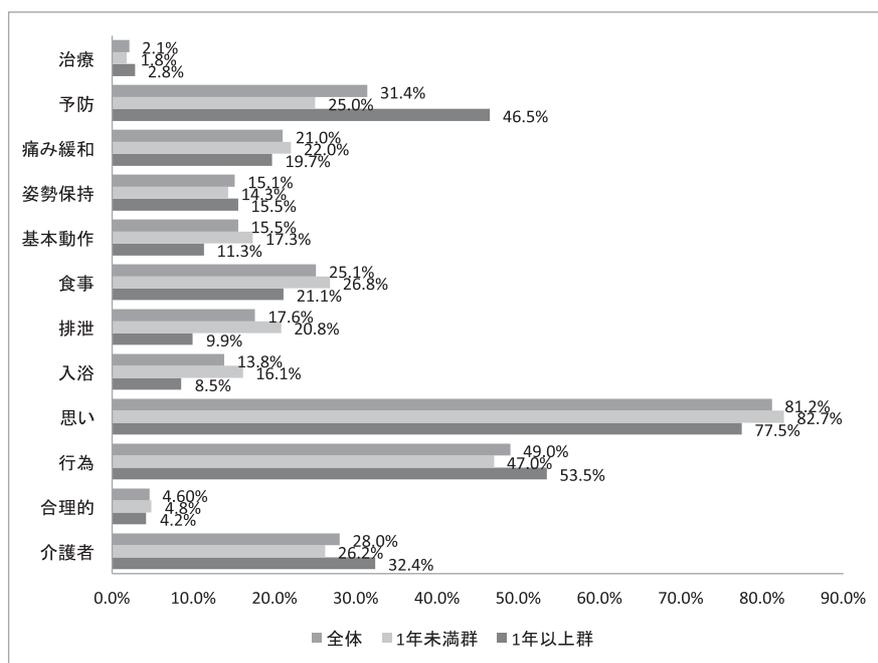


図2 全体および経験期間別群の「重要と思うもの」3つの選択

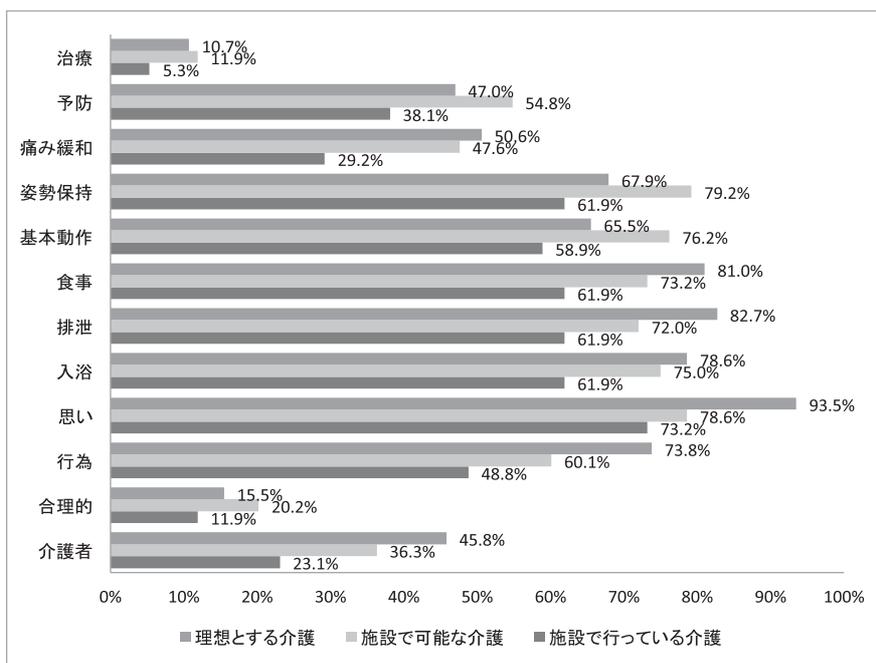


図3 設問別、項目別選択者割合 (1年未満群)

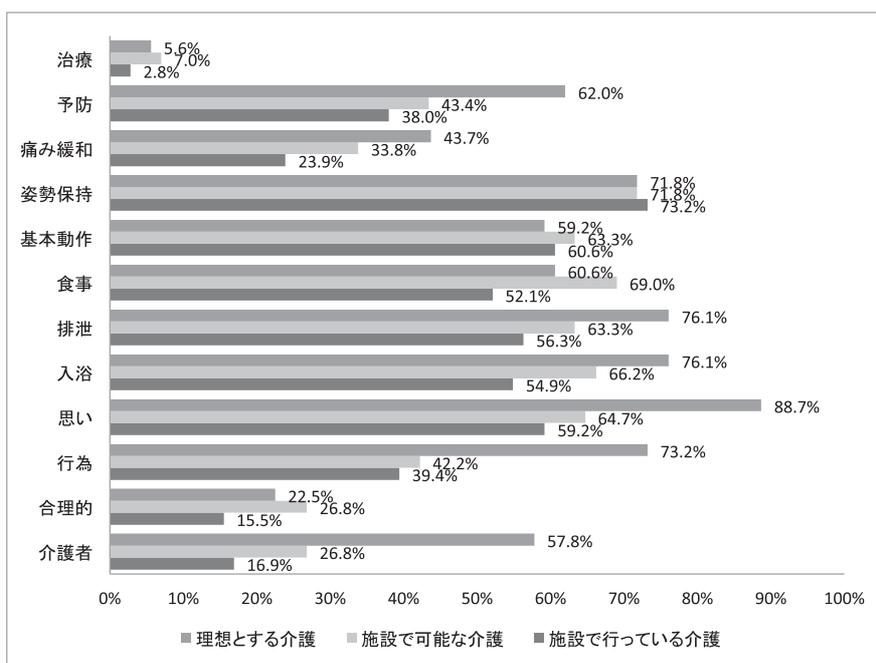


図4 設問別、項目別選択者割合 (1年以上群)

選択が少なかった項目は、各設問および両群ともに「治療」が最も少なく、次いで「合理的」であり全体と同じ結果となった。

『重要なもの』(図2)は、1年未満群は「思い」82.7%、「行為」47.0%、「食事」26.8%であり、1年以上群も「思い」77.5%、「行為」53.5%であったが、3番目は「予防」46.5%であった。

2) 各設問間の比較

各設問間の比較では、『理想とする介護』より『施設で可能な介護』の選択割合が低く、さらに『施設で行っている介護』が低くなる項目が多かった。以下に、これら比較における全体、経験期間別の特徴を示す。

(1) 全体

三大介護である「食事」「排泄」「入浴」は『理想とする介護』で、8割近くが選択してい

るが、『施設で可能な介護』で約7割となり、『施設で行っている介護』では約6割になっている。また、「治療」「姿勢保持」「基本動作」は他の項目と異なり、『施設で可能な介護』が『理想とする介護』に比べ選択割合が高い。

(2) 経験期間別

『理想とする介護』よりも『施設で可能な介護』において、1年未満群は「治療」「予防」「姿勢保持」「基本動作」「合理的」の選択割合が高い。1年以上群は「基本動作」「食事」が高く、「姿勢保持」は同率であった。また『施設で行っている介護』では、1年以上群の「姿勢保持」が他の設問よりも高く、「基本動作」は『理想とする介護』より高かった。

3) 相関分析

全体と経験期間別の2群の各項目において、『理想とする介護』と『施設で可能な介護』の

選択者、『理想とする介護』と『施設で行っている介護』の選択者、『施設で可能な介護』と『施設で行っている介護』の選択者の相関について分析を行った(表3)。

(1) 全体

各項目の相関分析では、「思い」以外の全項目において『理想とする介護』を選択した人と『施設で可能な介護』を選択した人の間、『理想とする介護』を選択した人と『施設で行っている介護』を選択した人の間に有意な相関がみられた。すなわち「思い」以外の項目では、理想と考えている事柄と現在勤務する施設でできると感じている事柄、施設で行っている事柄が一致しており、「思い」は一致しない結果となった。また、『施設で可能とする介護』を選択した人と『施設で行っている介護』を選択した人の間には、全項目で有意な相関がみられ、施設でできると感じていることと、行っていること

表3 各設問間の相関関係

		全体		1年未満		1年以上	
		可能	実施	可能	実施	可能	実施
問1. 病気や障害を治す介護	理想 可能	.000**	.001**	.000**	.001**	1.000	1.000
問2. 病気や障害を予防する介護	理想 可能	.000**	.000**	.000**	.000**	.001**	.000**
問3. 痛みをやわらげる介護	理想 可能	.001*	.002**	.000**	.000**	.026*	.171
問4. 好ましい姿勢(臥位や座位)を保つ介護	理想 可能	.000**	.000*	.000**	.000**	1.000	.378
問5. 好ましい基本動作(寝返りや起き上がり)の介助	理想 可能	.000**	.000*	.000**	.000**	.044*	.029*
問6. 適切な(当事者が楽しめる)食事	理想 可能	.000**	.006**	.001**	.000**	.074	.276
問7. 適切な(当事者が快適な)排泄	理想 可能	.000**	.000**	.000**	.000**	.000**	.055
問8. 適切な(当事者が快適な)入浴	理想 可能	.000**	.000**	.004**	.007**	.019*	.265
問9. 当事者の思いに寄り添った介護	理想 可能	.111	.200	.059	.166	1.000	.708
問10. 当事者が行いたいことを支援する介護	理想 可能	.000**	.000**	.000**	.000**	.295	.015*
問11. 合理的で短時間に終わる介護	理想 可能	.000**	.000**	.000**	.001**	.026*	.253
問12. 介護者が疲れない介護	理想 可能	.000**	.000**	.000**	.000**	.007**	.218

** 相関係数1%未満で有意(両側)

* 相関係数5%未満で有意(両側)

が一致していた。

(2) 経験期間別

1年未満群は、全体と同じ結果となった。

1年以上群でも、「予防」「基本動作」は全て有意な相関関係がみられ、「思い」は『施設で可能な介護』を選択した人と『施設で行っている介護』を選択した人の間にのみ有意な相関が認められた。以外の項目では、「痛み緩和」「排泄」「入浴」「合理的」「介護者」については『理想とする介護』を選択した人と『施設で可能な介護』を選択した人の間に有意な相関がみられたが、「治療」「姿勢保持」「食事」「行為」では有意な相関がみられなかった。また、『理想とする介護』を選択した人と『施設で行っている介護』を選択した人の間に有意な相関を認めたのは、「予防」「基本動作」「行為」のみであった。『施設で可能な介護』を選択した人と『施設で行っている介護』を選択した人の間では、「治療」以外で有意な相関がみられた。

5. 考 察

本調査の特徴は、高齢者福祉新任職員研修を受講する若手介護職の介護に関する意識を把握したことである。若手介護職の『理想とする介護』、『施設で可能な介護』、『施設で行っている介護』、『重要な介護』について、全体の結果および経験期間別の各群における比較から考察する。

1) 全体の結果から

(1) 介護職が理想とする介護について

介護職が『理想とする介護』では、「思い」を最も多くが選択した。次いで多くが選択した項目は、「排泄」であったが「食事」「入浴」と僅差であった。さらに「行為」、「姿勢保持」、「基本動作」が続く結果となった。

「食事」「排泄」「入浴」は三大介護と呼ばれ、介護業務の中で基本的支援とされている。また、「姿勢保持」「基本動作」と共に日常生活活動(Activity of daily living, 以下 ADL)に含まれる。今回の結果から若手介護職は、三大介護、基本的介助といった ADL の支援が重要であるという意識を持っていることが伺われる。

さらに、それ以上に「思い」の支援を理想と

していることが分かった。『重要なもの』でも、「思い」は 81.2% と最多の選択となった。このことから介護職が「思い」に対する支援の重要性を感じていると言える。

(2) 施設で可能な介護について

『施設で可能な介護』、すなわち現在勤務する施設でできると考えている介護については、「姿勢保持」の選択者が多く、続く「思い」に次いで「基本動作」が多い結果となった。また、「姿勢保持」「基本動作」の選択割合はいずれも『理想とする介護』よりも高い結果であった。これは、「姿勢保持」「基本動作」の介助が、介護職にとっては理想とする以前の当たり前前に実施できる介護であると考えている結果かもしれない。

また、「思い」は 2 番目に多い結果となったが、その割合は、『理想とする介護』に比べ約 2 割低い結果となった。分析結果でも、「思い」を『理想とする介護』で選択した人と『施設で可能な介護』で選択した人の間に有意な相関がみられなかった。これら結果から、介護職は「思い」を理想として取り組んでいるが、実際の施設ではその実施は難しいと感じていることが伺われる。

「行為」は、『重要な介護』で 2 番目に選択者が多く、ADL の各項目よりも高い選択割合であった。また『理想とする介護』では約 3/4 が選択していたが、『施設で可能な介護』では約半数に減少した。このことから、若手介護職は「行為」を理想とし重要な支援と思っているが、現場では思っているほどにはできないと感じていると考えられる。

(3) 施設で行っている介護について

『施設で行っている介護』でも、「思い」の選択割合は他の項目に比べ高い結果となったが、『理想とする介護』よりも約 3 割低い結果となった。さらに、分析結果でも「思い」を『理想とする介護』で選択した人と『施設で行っている介護』で選択した人の間に有意な相関はみられなかった。一方で『施設で可能な介護』と比べてもその選択割合は低かったが、設問間の選択者には有意な相関がみられた。このことから、若手介護職は対象者の思いに寄り添った介護を理想として従事しているが、実施できていない現状が考えられる。しかしそのような状況

においても、施設でできると思う者のほうが、思わない者よりも実施できていることが伺える。

「思い」の次に、「姿勢保持」「基本的介護」「食事」「排泄」「入浴」といったADLの選択割合が多い結果となった。これら項目は『理想とする介護』や『施設で可能な介護』との設問間に有意な相関がみられたことから、若手介護職にとって理想をもって取り組んでおり、実現できる環境もあり、できていると感じていると言える。

2) 経験期間別の結果から

本調査における1年未満群と1年以上群の比較結果から、経験期間の異なる介護職の考える介護の理想、現施設での実施の可能性、現状に違いがあることが分かった。

『理想とする介護』は、両群ともに「思い」の選択割合が最も高く9割以上が選択している。1年未満群は、次いで「排泄」「食事」「入浴」が約8割、「行為」が7割、「姿勢保持」「基本動作」が6割台と全体と同様の結果であった。1年以上群でも「排泄」「入浴」が76.1%、「行為」73.2%と1年未満と類似の結果であったが、次に多い項目が「基本動作」71.8%、「予防」62.0%であり、「食事」は60.6%であった。1年以上群で「予防」が、1年未満群の47.0%に比べ高い割合であったことは、介護経験を積むことで「予防」の意識が高まるということが考えられる。

また、1年以上群は『理想とする介護』で「食事」の選択割合が低かったが、『施設で可能な介護』では「姿勢保持」に次いで2番目に選択者が多く、またその選択割合も69.0%と『理想とする介護』より高くなっている。「食事」の『理想とする介護』と『施設で可能な介護』の選択者間の相関においては、1年未満群は有意な相関がみられたが、1年以上群では有意な相関はみられなかった。他の三大介護である「排泄」や「入浴」は『施設で可能な介護』のほうが選択者は少なく、『理想とする介護』と『施設で可能な介護』の選択者間に有意な相関がみられている。これらの結果は、三大介護のうち「食事」は、経験を経ると介護職にとって当たり前でできる介護と認識されることを表

しているのかもしれない。

さらに「行為」において、1年以上群は『理想とする介護』に比べ『施設で可能な介護』の選択割合が3割減少する結果となった。1年未満群では約1割の減少で、設問間の選択者でも有意な相関がみられるが、1年以上群では有意な相関はみられなかった。このことから、経験を経ることで「行為」を理想としてはいるが、実際の施設ではその実施が難しいと感じるようになっていられると考えられる。

『施設で行っている介護』では、1年未満群は「思い」が73.2%で最多、次いで「姿勢保持」、三大介護、「基本動作」の選択が約6割であった。『理想とする介護』の選択割合と比較すると「思い」、三大介護は約2割、「姿勢保持」「基本動作」は1割程度の減少となった。また、いずれの項目も『施設で可能な介護』よりも低い割合となった。1年以上群では、「姿勢保持」「基本動作」「思い」の順に多く、続く三大介護は5割台の選択となった。『理想とする介護』と『施設で行っている介護』の選択者間には、1年未満群では全ての項目で有意な相関がみられたが、1年以上群では「予防」「基本動作」「行為」にのみ有意な相関がみられた。一方で、『施設で可能な介護』では、「治療」以外全てに有意な相関がみられている。これら結果から、介護職は経験を積むことで理想と実際に違いがあると感じていることが伺われる。この違いを解消することが、若手介護職がやりがいを持って支援を行ううえで必要と考える。若手介護職の離職を防ぐうえで、今回の調査結果でみられた理想と現実の差を解消するための方策を検討することが必要である。

6. おわりに

高齢者福祉新任職員研修を受講した若手介護職を対象として質問紙による調査を行った結果、若手介護職は「対象者の思いに寄り添った介護」を理想として勤務しているが、実際の施設では十分に実施できていないと感じている現状が分かった。一方で、ADLに対しては、実施できる環境とできている現状が合致していることが伺われた。また、「姿勢保持」や「基本動作」は、若手介護職にとって、その役割とし

で当たり前に行える内容として捉えられていることも明らかとなった。さらに1年以上の経験を有することで、1年未満の介護職とは異なる意識を有していることも示唆され、特に「食事」については、「姿勢保持」などと同様に当たり前に行える内容と感じていることが分かった。

本研究の課題として、今回の調査は対象となる介護職の主観を基にした結果である点があげられる。『施設で可能』、『施設で行っている』とした内容について、実際の環境や実践は確認していない。今後は、今回明らかとなった事柄が実際の現場でどのような状況にあるのかを検証したい。また、介護職は勤務施設や取得資格が様々であることから、所属別、資格別の結果についての検討も必要であった。今回は、対象群の母数に偏りがあり、詳細を示すことができ

なかった。これら課題を踏まえ、今後も介護職がやりがいを持って働くことができる要因について、さらなる検証を実施したいと考える。

謝辞

本調査に協力頂きました高齢者福祉新任職員研修受講者の皆さまに深謝いたします。

文 献

- 1) https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf (accessed October 10, 2019)
- 2) http://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp29_ReportALL.pdf (accessed September 17, 2019)
- 3) 神部智司. 介護老人福祉施設における若手介護職員の労働環境に対する認識. 大阪大谷大学紀要. 2012: 46, 63-72.
- 4) 廣野正子. 特別養護老人ホーム介護職員のストレスと仕事満足度－Sense of Coherenceの視点に注目した質的研究－ 郡山女子大学紀要. 2018: 54, 223-238